

今年度の活動方針

医学教育センター長 福沢嘉孝

平成16年度の新カリキュラム導入から7年目を迎えた今年度は、教育システム全体を見直すべき時期といえます。短期的にはクリニカル・クラークシップの本格導入に向けての準備、中・長期的には、医学教育センターと教務委員会との横断的連携組織による大きな視野での現行カリキュラムの分析・検討を進めます。中でも、特に重要なのは客観的な成績評価の導入です。進級・卒業判定、学年次指定の厳密性の確保、成績優秀者の表彰や学納金免除制度における公平性の確保など、以前から検討中の「GPA制度の導入」がもたらす効果について、既にシミュレーションを進めております。また、評価制度の整備と同時に試験問題のさらなる質の向上も追求します。総合試験における試験問題の質向上と作成業務の効率化のための試験管理委員責任者との連携強化、共用試験におけるCBT試験問題の採択率(81.35%(全国Ave.77.5%))を維持・向上、OSCEには欠かせないSP(模擬患者)の育成(質の標準化と向上)を目指し、SP連絡勉強会の益々の活性化と充実を図ります。

学生教育同様に力を注ぎたいのがFDです。この役割と重要性は年々高まっています。今後も、本学の医学教育力向上に必要なテーマを積極的に取り入れた「医学教育ワークショップ」の一層の充実を図ります。(今年度実施の第4回医学教育ワークショップは平成23年1月15日(土)~16日(日)を予定しています。)

成績不振に陥った学生への支援も当センターの重要な役割です。「父兄懇談会」、「個人面談」に始まり、学力向上や不得意科目の克服、新学期への勉学意欲の持続を目的とした「学習会」、さらには、学生の留年事情の追究(留年予備群の早期ピックアップ)、これに基づく対策の立案、実行を継続的に実施します。同時に、学生部、教務部との横断的連絡協議の場を積極的に設けて、センターの一部門レベルではなく、大学全体レベルにおいて「進級支援」を検討・追求していくための地盤を築いていくことも、当センターの大きな役割であると考えます。

「ACISIS」って何？

ACISISとはAichi-Clinical-Skill-Improving-Siteの略でアクシスと読み、学生の頃から臨床技能を身につけようというサークルのことです。ACISISでは、1) **ACLS**という心肺蘇生法や、2) CT・MRIの判読法、3) トリアージ法などに関して、学生自らがテーマを選択して、企画・運営しています。臨床現場で実際に使用している医療機器を病院に貸していただき、それを実際に活用し、体を動かしながら楽しく学んでいます。(能動学習) テレビドラマで心停止の患者に対して**電気ショック**をしているシーンをよく見かけますが、その医療機器も実際に使っています(写真円内)。このような活動は愛知医大のみではなく、**全国の医学部**でも実施しており、ACISISの**メーリングリストに登録**すれば、全国各地の様々な勉強会に参加することができます。

目の前で大切な人が倒れたら、あなたは何かできますか？心肺停止で搬送されてきた患者さんを前にして、あなたはどうか立ち向かいますか？その答えはACISISにあります。私たちと一緒に、みなさんも蘇生への**情熱**、燃やしてみませんか？

学生代表：丸地佑樹



顧問：

医学教育センター 教授 福沢嘉孝

病棟実習を通して医学生としての自覚を高める

「人間科学4(医師と社会・早期体験実習)」担当責任者 福沢嘉孝

6月28日(月)からの3日間、医学部の1学年次生が病棟実習を行い医療の実際を体験しました。学生たちは、事前に実習に向けての予備講義、実習の意義を理解してもらうためのガイダンスを経て実習に入りました。実際には、終始受け身でいた学生、積極的に臨んだもののこれまでの授業や実習で学んできた“コミュニケーション技法”が思うように実践できない学生が少なくありませんでした。この点は、我々教員側にとって今後の大きな課題です。しかしながら、このような学生たちも、朝から晩まで目の回るような忙しさの中で、緊急度・重症度を判断し処置を行い、患者さん、その家族のメンタルケアまで“笑顔”でこなす看護師さんの姿、また、「頑張ってね。よいお医者さんになってね。」など温かいお言葉を掛けてくださる患者さん、さらにはスタッフ一人一人からいただく熱心な指導を通して、チーム医療における看護師さんはじめ各スタッフの役割を把握できたこと、各スタッフが常に相手の気持ちを考え動いていること、これらの重要性と難しさなど、大変多くを学んだ充実の3日間となったようです。最後に今回の実習にご協力くださいました各病棟のスタッフの方、患者の皆様方に対しまして、この場をお借りして深くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



車いすで移動される患者さんをサポートする学生



スタッフステーションにて担当主任の話真剣に聞く学生たち

「医療従事者としてのあるべき姿を体験」

4D病棟実習生 柿崎結美

実習前は、病院内ってどんな様子なのだろうと不安もありましたが、看護師の皆さんを初め、医師、薬剤師、事務の方、看護補助さんが温かく迎えてくださいました。初めて、仕事の様子や病棟の雰囲気を感じ、新たな発見ばかりの3日間だったのですが、中でも特に驚いたことが2つあります。

1つ目は、看護師の皆さんの仕事が多岐にわたる、絶え間なく動いているということです。それぞれが忙しくても、お互いに声を掛け合って確認をしたり、役割を分担したりして、医師のサポートから雑用に至るまでの幅広い仕事をテキパキとこなしていく上、なにかあればすぐにメモを取るなどして、患者さんの言葉の中にある意見や要望を決して聞き逃さないようにと常に意識していらっしゃる姿に感動しました。

2つ目は、医師・看護師以外のスタッフの方が多くいらっしゃったことです。入院の説明、電話の取り次ぎを行う事務の方、シーツ交換、食事の配膳、掃除を行う看護補助さん方それぞれが本当に大きな力となっており、それはまさに、私たちが今回の実習で学ぶべき『チーム医療』の姿でした。

また、話すことが困難な患者さんに対しては、まず、身振り手振りで何を患者さんが言おうとしているのか一生懸命聞き取ろうとし、どうしても分からない場合には筆談という手段をとっていました。初めから筆談するのではなく、ジェスチャーを使って会話しようとする姿勢がすばらしいと感じました。また、看護師の皆さんは患者さんとのなごやかな日常会話の中で、体調についてもきちんと把握できていました。患者さんの中には、なにか言いたいことがあると必ず決まった看護師さんを選んで話を聞いてもらう方もみえました。将来

そんなふうに関心される医師になりたいと心から思いました。実習中、病室に入ったときに担当主任さんが「医大生さんも見せてもらうね」と患者さんに言うと、患者さんは快く笑顔で返してくれていました。また、食事を持っていくと、「ありがとうね」と言ってくださって、これらがきっとやりがいになっているのだと感じました。それぞれの患者さんが重い・軽いはあるにしても皆さん病気を抱えているにも関わらず、明るく振舞っている様子が多く見られました。これらのことから、実習においても医療行為等を見学するだけでなく患者さんを一人の人間としてみるべきだと思いました。私たちはまだ医学部に入学して3ヶ月ほどしか経っておらず、医学的知識もほとんどありません。実習中もほとんど見学していただけでした。それでも忙しい中看護師さんが一人一人について丁寧に説明して下さい、本当に感謝しています。医療従事者としてのあるべき姿を体験できたことが今回の一番の成果でした。ありがとうございました。



4D病棟で実習中の柿崎結美さん(写真中央)の様子